

行動

「おの100」との出会いは何気ないものだった。大学にある階段横の掲示板にふと目をやった時だ。ボランティア関係のことが紹介してある掲示板にある「おのみち」の文字だけが目にとび込んだ。尾道から離れて、西条で一人暮らしをして2年が過ぎていた。故郷である尾道で何があるのだろうかというほんの小さな興味が始まりだ。

その時、教職の道を目指し、大学3年生になるも、何かしなければという思いだけが頭の中を駆け巡るだけで、実際には何もしていない自分がいることに気づいていた。思うだけで、考えるだけで行動をしていなかった。今思い返しても、一人でそのチラシを見ていたらやはり行動には移せなかったと思う。しかし、一緒にそのチラシを見た友達は、すぐにメールをし、詳しいことを尋ねた。「説明会に尾道まで行かないといけならしい」「本番まで何回か研修があるらしい」ただ当日だけボランティアをすればよいわけではないことが分かり、面倒だなと感じつつも、友達の存在もあり、とりあえず説明会に行ってみようということになった。その後、2回続けて「おの100」学生ボランティアとして参加した。

「おの100」は、自己否定の連続だった。なぜかできる気でいた。しかし、できないことの方が多かった。子どもを教育するどころか歩かせることもできない自分がいることに恥ずかしささえ感じた。

今、大学を卒業し、教師として子どもの前に立っている。今でも「おの100」での経験が活着していると感じることもある。行動したからこそ失敗することができた。失敗するからこそ次へとつながる。私には、「おの100」において成功した思い出は全くない。しかし、それらは全て悪い思い出はなく、忘れられない大切な思い出である。

社会人と学生の大きな違いは、考える時間があることだ。学生時代は、一見どうでもいいようなことでも深く時間をかけて考えることができた。そして、「おの100」こそが、私にとって考えたことを行動する場だった。

本稿は、3年前に途中まで書いたものの、日々の忙しさにかまけ、寄稿までたどり着けなかったものである。今回、「おの100」の存続のため、修了生の一人として「おの100」の良さを伝えたいという思いから書きなおし、寄稿させていただいた。

「誰も読まないだろう」「誰のきっかけにもならないだろう」という気持ちもある。しかし、行動しなければ何も始まらないということを、私自身で実践していくためにも寄稿した。誰かの「おの100」ボランティア参加のきっかけになればという思いだけである。